

集
今日の雪

大佛次郎

光風社書店版

今日の雪

昭和四十五年九月三十日 印刷
昭和四十五年十月十日 発行

△検印省略▽

定価九五〇円

著者 大佛次郎
発行者 豊島 澁
印刷者 菅生 定祥

発行所

株式会社光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

0095—071101—2265

目次

花々

高砂

水の音

花あちこち

枯れ野

京からかみ

ちいさい隅

飛驒の朝市

散歩について

山中人生

「富岡の家」後日

物を書く話

x

今昔

三十年目

アフリカの維新

二つの音楽会

ビートルズを見た

都会の原っぱ

九

三

六

一

三

三

三

六

四

四

五

三

五

五

六

三

六

途 上

花和尚

三つ子の魂

「三姉妹」のこと

秋の日

生命のある画

ナポレオンの寝台

真紅の帆

横浜の舟待ち

湖水めぐり

生きた舞台

人間の空間

x

正月三ヶ日

根無し草

落 語

冬の日曜日

積 雪

鶯の宿

泥棒の弁護

背 中

出 石

七〇

七三

七六

七九

八二

八五

八八

九一

九四

九七

一〇〇

一〇三

一〇六

一〇九

一一二

一一五

一二〇

一二三

一二六

一二九

一三二

一三五

吹切れる	三三
人間の都会	三六
路地礼讃	四一
朝の歌	四四
肥後の菖蒲	四七
都会の砂漠	五〇
屋上庭園	五三
老手	五五
桃原	五九
ひぐらし	六三
夏休み	六四
サマース・デイ	六六
夏の花	七一
マキシムの女	七三
歌と台詞と	七五
萩の花	八〇
遊園	八三
ビルマの竹	八五
名所絵葉書	八八
秋の寺	九一
「三姉妹」の楽屋	九四
礼儀	九七

冬の宿

二〇〇

×

雪の津和野

二〇五

近くに在る顔

二〇八

鎌倉の門

二一三

スペインの皿

二一三

今年の雪

二一六

陽光

二一九

「赤穂浪士」

二二三

花咲爺

二二五

隣人

二二八

上州路

二三二

舞台の「三姉妹」

二三四

ジャングル

二三七

豆腐屋の弁護

二四〇

紅葉の寺

二四二

新旧歌舞伎

二四四

或る日或る時

二四六

閉じた扉

二五一

×

屋上造林

二五七

戦争と平和

二五九

梅の花と地球	二六三
人ひとり	二六五
日暮れて	二六六
唐物あきない	二七〇
三千院	二七四
話し言葉	二七六
菜の花畑	二七九
星の手帳	二八三
人形と人間と	二八三
銭洗弁天	二八六
天王山	二九〇
ざくろの窓	二九三
北海道から	二九六
鈴　　蘭	二九八
ひとつの陳情	三〇一
生きているもの	三〇四
アポロの兎	三〇七
幕が降りれば	三一
ある終着駅	三四
英国の顔	三八
左團次	三二
死神見物	三三

足袋の話	三三
鞍馬天狗の頭巾	三六
冬 菜	三二
評判劇「ヘアー」	三四
青い鳥	三八
歳晩の花	四一
×	
初芝居	四七
足で歩くこと	五〇
冬物語	五三
膝栗毛	五六
わしが在所	六一
梅の右大臣	六五
信太さん	六七
当麻寺	七一
突貫的進歩	七四
二人静	七七
陽 光	八〇
樟の若葉	八三
鳩の来る窓	八六
何も無い村	八九
あとがき	九三

花

々

高砂

正月能の舞台で、「翁」と「高砂」を見た。「高砂」は旅びとが九州から都に上る途中、播州高砂の浦に来て、うららかな初春の日に、如何にも清らかな老人夫妻が木蔭を掃き清めているのを見た。有名な高砂の松はどれかと尋ねると、この木だと教えられ、それから古歌など引いて、松が万木にすぐれて、めでたい木であることを話し、どこの者かと言う問に対し、我々はこの高砂の住の江の相生の松の木であると答え、小舟に乗って沖に姿を消して行く。そのあとが、婚礼の席でよく謡われる「高砂やこの浦舟に帆を上げて」の曲となる。

もう二十年あまり前になるが、同じ播磨の室の遊女で知られた平安朝頃からの古い港、室の津を訪れた折、気まぐれから、高砂の松、相生の松を眺めに、車を回した。高砂の松は、村の人家の中に在る社の境内に、最早枯れて了って大きな根株だけ残ったのを屋根のある堂の中に保存してあって、境内には高砂の松として別の若木を植えてあった。見ていると買物帰りらしい村の者が垣の外を通ったり物の煮たきの匂いがしている。海は見えないが、すぐ近くに在るらしい趣きであった。

「高砂」の尉と姥との姿を見せた松も枯れて了っていたのである。

「高砂の尾上の鐘の音すなり。暁かけて霜は置けども、松が枝の葉色は同じ深緑、立ち寄る陰の朝

夕に、かけども落葉の尽きせぬは、真なり松の葉の散りうせずして、色は猶正木のかづら長き世の、たとへなりける常磐木の中にも、名は高砂の末代のためしにも相生の松ぞめでたき」

枯れた木の根は赤く乾いて、指を触れると崩れそうにもろくなっていた。葉色は同じ深緑でなく、松の木のミイラであった。しかし、この高砂の松の方はまだ痕跡を留めている。「相生の松」へ行つて見ると、「婚礼式場」と木の札を出した社務所の建物があるが、松は新しく若いのが名ばかり在るだけで、奥に物置のような小屋があつて、「相生の松」としてあるので、これも小屋の中に入つて了つたのかと、戸をあけて見ようとしたが、鍵をかけてあつて開けてくれる神主（？）がいない。ままよ、と、明り取りの窓があるのから、苦勞して内部を覗き込むと、納屋風に棚があつて、そこに輪切りにした木の幹のようなものが、火鉢の胴ぐらゐの大きさで、でんと置いてある。相生の松の御神体はこれらしかった。

「相生の松風、颯々の声ぞ楽しむ、颯々の声ぞ楽しむ」

その松風など、この輪切りにした木の幹からは聞えよう筈がない。苦笑もし、がっかりした。「高砂」は能としても長く古い。足利時代か、もつと以前から天下の名木として知られていたとしたら、現代まで生きて繁つていると想う方が無理だった。

戦後には松食い虫などと、困つたものがどこからか入つて来て、特に樹齡の古い松の木ほど被害を受け、一般の松の木も、火事にでも遭つたように順に枯れて赤くなつて、失われて行つた。僅か三十年か四十年前の日本の景色が、どこへ行つても美しい葉色の松で飾られていた事実を、人はもう知らずにいる。日本の風景は松の木があるのが外国と違う特徴であつた。「高砂」のような古い

松の木を神々しいと見る伝説なども、そこから出たものらしい。南フランスのカヌヌ近くの海岸に赤い岩山に松が繁っている場所があって、サガンの小説を映画にした時にもロケエションに用いられていた。地中海の水がインキののように明るく青く、岸の岩がその地点だけ朱色なので目立つのだが、この松の木が美しいのではなかった。ここの松は葉が柔かくて、葉色も日本の松のように光を受けて一本ずつ鋭く輝くような性質のものでない。颯々たる松風の音など立つものでなかった。「清滝や浪に散り込む青松葉」の目に見えるような鮮やかで清々^{すがすが}しい色はなかった。イタリアの風景の中にも松は在るが、やはり松は日本のものが並木でも孤独に立っていても優れていた。ローマの古い街道松などは、蝙蝠傘をひろげたような、とほけた形に見える。

その松の木が、日本の海岸地帯から失くなってしまったのは、何としても残念なことだし、私たちが見た日本の風景と、今日若い人たちが見ている日本とは、まったく異質のもののような気がする。広重の画の中に、どれだけ松の木が姿を見せていることか？「唐崎^{からさき}の夜雨」の有名な松だけではない、名所でない普通の風景の中に松が大きな役をつとめている。それほど、昔、日本の風景の中には、松の木が多かったのである。私が永く住んでいる鎌倉について考えて見てもよい。もと鎌倉は町を歩いていて、どの方角にも青く山が見え、その山を飾っているのは、夥^{おび}ただしく多かった松の木であった。山の尾根には列を作って松の梢が、晴れた昼の青空や、月夜の空に山の輪郭を作っていたし、鶴岡八幡の鳥居の前から海まで真直ぐに一筋の道は左右に十メートル近く高い古い松の並木で綴^{つづ}られていた。それらの老松も、若い松も、この三十年間に全滅して、ほとんど一本もなくなつて了った事実を人が知つたら、風景がどのくらい変つて了ったか、わかつて貰えると思う。山の

上に二、三本、毛が生えたように残っているのが、昔、見事な列を作っていた松の木の名残りである。それも、やがて枯れて行く運命に在る。古い人たちは、海岸に松がないのを景色として卑しいと見た。今日は、そこに舗装されたドライヴウェイが走り、スピードを自慢で車で走る若い人達は、広く大きな空間をひとまたぎに征服することだけ頭にあつて、道ばたに偶に残っている孤独な松の姿など、在ったか無かつたか目につかないのである。高砂の松も相生の松も目出度い昔話であろう。しかし、この若い人達の結婚式へ行くと、婚礼の菓子と並べて、「高砂やこの浦舟に帆を上げて」の謡がまた目出度く出て来る。

(四四・三)

水の音

書齋の窓から冬の青空を見て、ふと、どこかへ行つて水の音が聞きたいなと思った。小鳥や蝶が私たちの身のまわりからすくなくなる前から、水の声は遠いものになつていた。

もとは鎌倉内でも、滑川沿いの道へ出ると、雨の後など繁った木の枝をくぐる流れの音が聞え、山の内の道路には野川のような溝川があつて、落椿の花を浮べたり、芹やなずなの青い色を見せ、浅瀬につかえた水が、小さく歌でもかなでるようちよろちよる鳴っていた。その流れにも免れ難くコンクリートの蓋がかぶせられ、自動車が続げざまに通る舗道となつた。当然と申し上げるより

外はない。

越前の武生が、往来にこんこんと豊かに水の流れる一筋の溝が通り、町なかに松並木もあって影を投げていると聞いて、慕わしいことに思い、永平寺、一乗寺谷を見るついでに、車を回して町に入ったら、ここも並木を伐り倒し流れに蓋をして単調にのっぺらぼうな風情のない道路となっていた。道端に立って、光って流れるきれいな水を見ることは、もう出来ない。失望して引上げて来た。賤ヶ岳の古戦場から北陸へ入る道にも、柳ヶ瀬の駅路の中央をさかんに水の流れる一筋の溝川が路面にすれすれにあって、女たちが洗濯をしていたり、季節の草花を束ねて置いてあったり、小鳥が降りていた。街道のことだから、ここもすでに近代的舗装を終っているかも知れない。大和の飛鳥川、美濃の郡上八幡へ盆踊りを見に行くのに、岸を伝って山中に入る長良川のきれいな流れと、さわやかな瀬の音を聞いた記憶は忘れ難い。無名の土地を歩いても、水の音を聞く機会は多かった。奥州平泉の泉三郎館跡の丘をめぐる小川も雪消の水を集めて清く透きとおっていた。地方の都市に残る川は声を失くしているが、水があるだけで豊かな、ゆとりのある風情を感じさせた。

もと、木村莊八さんが東京の京橋のお竹河岸の川に白魚が泳いでいるのを岸からのぞいた話をしてくれた。明治の終りころでも、隅田川だけでなく、市中のあのあたりの掘割にも、汐に乗って白魚が入って来たのである。「あいつはね、からだがすきとおっているから、たくさんいても目だけが胡麻のようにぼつんぼつんと黒く水ん中に見えるだけなんですわね。いつもたくさんで、通って行きましたよ」と莊八さんは話した。明治が終るころの話であろう。あの辺から大川端なら歌舞伎の三人吉三の芝居など思わせる舞台で、水音も刻んで続けて打つ大太鼓の音となる。どんと強く大き

く打ったら、人が落ちたか身投げがあったことになる。

冬の始めに、團伊玖磨君の指揮でドビュッシーの「小組曲」を聞いた。最初のが「舟に乗って」というので、舟あしが静かに嚙んで行く小波のささやきや櫂の音が繊細なリズムで刻まれて、きく者がゆるやかな水上の舟に身を托しているような心持になる。ドビュッシーは、ボードレールやヴェルレーヌなどの象徴詩派と並び、絵画では印象派と共に作曲を展開して行ったひとだが、ヴェルレーヌなどと同じく、ロココの艶麗な風韻を覚えさせる曲が多い。ワットーやフラゴナールの時代のものだが、演奏を聞いていて私はあの時代にはブランコ遊びはあったが舟遊びはなかったと気がついた。男でも仮髪を付け、刺繍のある絹の衣裳でいたのだから舟遊びで着物が水にぬれるのは男女とも嫌ったのだろう。

ワットーの名画「シテール島への船出」は、海を渡る金色燦爛たる巨船であつて、これは静かな水を分けて進む小舟の遊びである。思い返せば、印象派の画家モネやルノワールに、ボート遊びの若い男女を描いたものが多い。セーヌ河の下流にグルヌイエールという郊外の土地があつて、貸ボートに乗って遊ぶのが一時画家文人の間に流行した。モデルの女など連れて行くのだし、芸術家たちは気取つて、水夫が着る横縞の派手なシャツなど着込んでゐる。このシャツはドビュッシーの水の音の典雅な曲にふさわしいものでない。川波のリズムとゆるやかな、やや樂欲的でさえある心持の舟の進行と軽い動揺にふさわしいのは、やはりロココの時代の男女が乗っているのでなければならぬ。グルヌイエールとは蛙の住む沼の意味で、郊外の芦ばかりの川岸に、当時貸舟屋を兼ねた小さい料理屋があつただけの土地の呼び名だったろう。もとは専ら蛙の領分だったのである。オペラ